

少子化対策の新しい方向性

北村 安樹子

<進む少子化>

集合住宅の増加で、最近のこいのぼりは「あげる」ものから「飾る」ものになったとも言われるが、サイズは変わっても、子どもの成長を喜ぶ親や祖父母の気持ちに変わりはないだろう。子どもが少なくなっている分、一人あたりに対する関心や期待は、むしろ大きくなっているといえるかもしれない。

厚生労働省の「人口動態統計」によると、2001年の合計特殊出生率は1.33であり、わが国の少子化傾向には依然回復の兆しがみられない。少子化が進行している背景にはさまざまな要因が考えられるが、子育てをめぐる経済面や精神、身体面での負担感もその1つだろう。

<辛くも楽しい子育て>

内閣府の「国民生活に関する世論調査」によると、「あなたは、自分にとって子育てを楽しんでいることが多いと思いますか。それとも辛いと感じることが多いと思いますか」という設問に、男性の40.8%、女性の44.7%が「楽しいと感じることが多い」と答えている（図表1）。一方で、「楽しいと感じることが多い」と「辛いと感じることが多い」と答えた人もそれぞれ36.9%、40.1%を占めており、子育てには楽しい面だけでなく、辛い面もあるということが伝わってくる。

このデータが示すように、子育てには「喜び」と「負担」という二面性がある。厚生労働省が実施した「第1回21世紀出生児縦断調査の概況」をみても、子どもをもって「よかったと思うこと」と「負担に思うこと」がともに数多くあげられている（図表2、3）。ただし、両者を比較すると、「負担に思うこと」よりも「よかったと思うこと」の方が、全般に高い割合であげられていることに気づく。

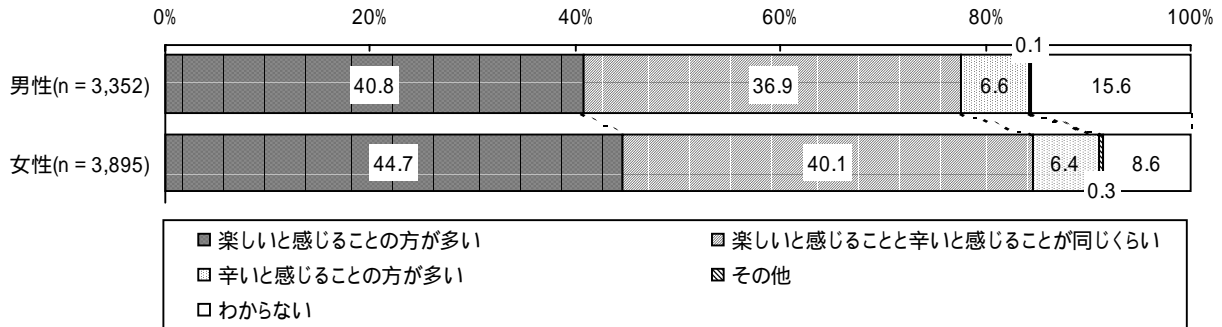
<少子化対策から次世代育成支援へ>

少子化問題を考える上で、子育てをめぐるさまざまな負担は依然大きな社会的課題である。育児と仕事の両立の問題、子育てにかかわる費用、育児に関する精神的不安など、子育てにかかわるさまざまな負担を緩和するための政策が引き続き重要であることに変わりはないだろう。

一方で、これまでの議論を振り返ってみると、少子化の要因を探ろうとするあまり、子育てのマイナス面に関する情報ばかりが強調されてきた側面はないだろうか。先の調査結果が示すように、子育ては楽しいばかりではないが、辛いだけのものでもない。子どもの存在や子育ての経験がもたらす喜びや楽しみを、次世代に伝えるという視点があってもよい。

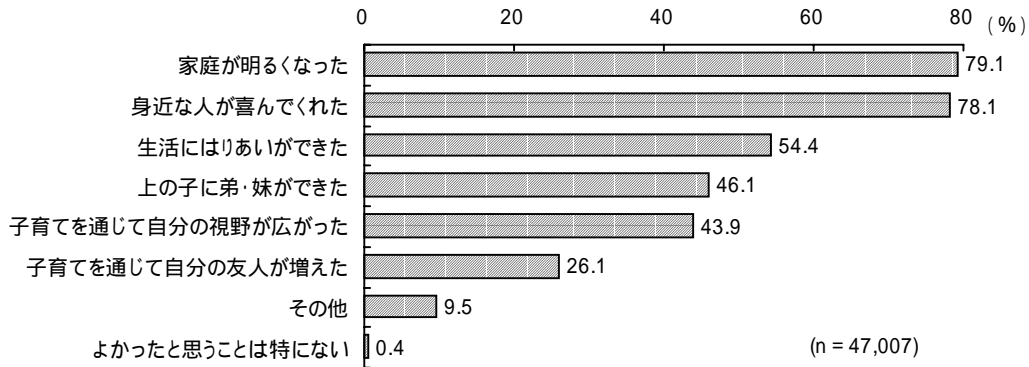
厚生労働省が昨年9月に発表した「少子化対策プラスワン」にも位置づけられている、中高生と乳幼児のふれあい体験はそうした試みの1つでもある。家庭科の体験学習や地域事業を通じて、若い世代が子どもとかかわる機会を創り出す動きが各地で始まっている。若者という次世代が、子どもや子育てにふれる機会を通じて、子どもの存在や子育ての意味について考えるきっかけとなることを期待したい。

図表1 子育てに対する意識



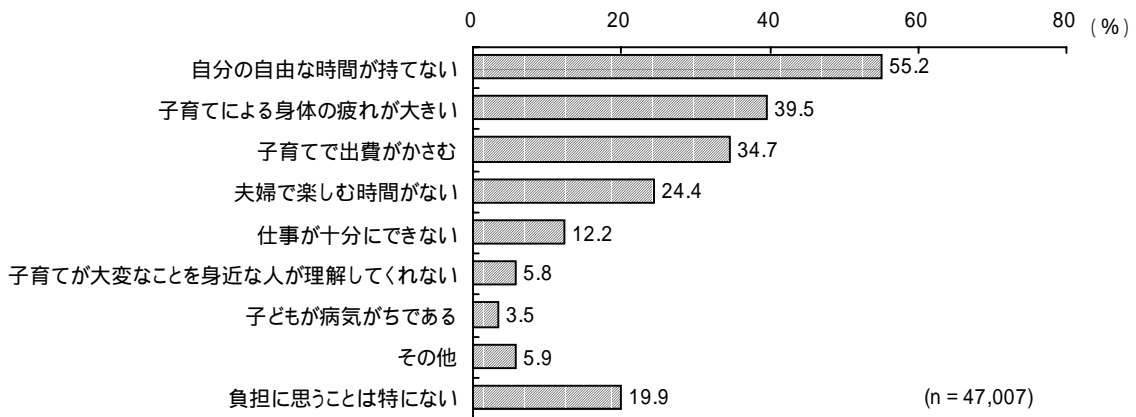
注：子どもがいる人は自分の体験に基づいて回答し、子どもがいない人は子育てをする場合を想定して回答を求めている
 資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」2002年11月（調査対象：全国20歳以上の男女10,000人、調査時期：2002年6月）

図表2 子どもをもってよかったと思うこと(複数回答)



注：回答者は親などの保護者
 資料：厚生労働省「第1回21世紀出生児縦断調査の概況」2002年10月
 （調査対象：2001年に出生した全国の子53,575人（1月10日～17日、及び7月10日～17日の間に出生したすべての子））
 （調査時期：子どもが月齢6カ月となる2001年8月1日現在（1月出生児）及び2002年2月1日現在（7月出生児））

図表3 子どもをもって負担に思うこと(複数回答)



注・資料：図表2に同じ